うつほ物語

ぬまいの巻 上

七

さゝみかん

並二

特別
へ12
4327
7

174

○一ヨリ九丁ノ内ニラウスケ乙面
○九丁ニ琴ヲ京極ようつみ
○カスガニテセレアソビ十四イ
○三人ヌリ十五ヒ

今本十五下
白本六吹上上
絆本下

かくて紀伊國むろのこほりにかみなひのたねまつ
といふ長者かきりなきたからの王にていまし
あはせさりし人なくてかたちよけれてなにかを
はりそれのめやくは源の實忠とかきしたる大
納言のむすめなりしときとなかもらうとかうとはた
もすくなからずもあるにことうしなひて世の中をまかせて
つかひするほとさはまかりたりけてそのつかうふさき
むすめ一人をつくれいはのそくにつかうまつりけるかう
なりにぞ源氏なりて雨むすめおほかりけるかう
うまくうまねみなときうりもなくそう
とよりひとりのみをかしとあらはらゆともかり

門 へ 12 號 4327 巻 7

昭和廿四年 高田早苗

かくて紀伊國にむかしありけるよしみなひろたる中川
といふ長者ありけるが、そのなをかんなびのたねまつといふ
あれはさるべき人のかたちをもなくて公につかへ
ありけるがめのとは源の恒有とまをす大
納言のむすめにてありしかども、ちゝにはなれて
もろこしにもわたりてぞありける。世の中のあはれ
つねひさしからず川のほとりにすみけるが、ふたり
ひとりの人はさきのよのくしきもつかれたるに
ちかき源氏の御むすめなりければ、かくいふ
ことをもよくわきまへて、ものしりになりけ
るうちにもよそのおもふことあるにつけて

門へ12
號4327
巻7
昭和廿四年四月一日
高田(?)寄

つい地 一本 ちむ 陣
らう 一本 廊 楼 らうろう トス
一 絣本同

梅檀 優曇 花

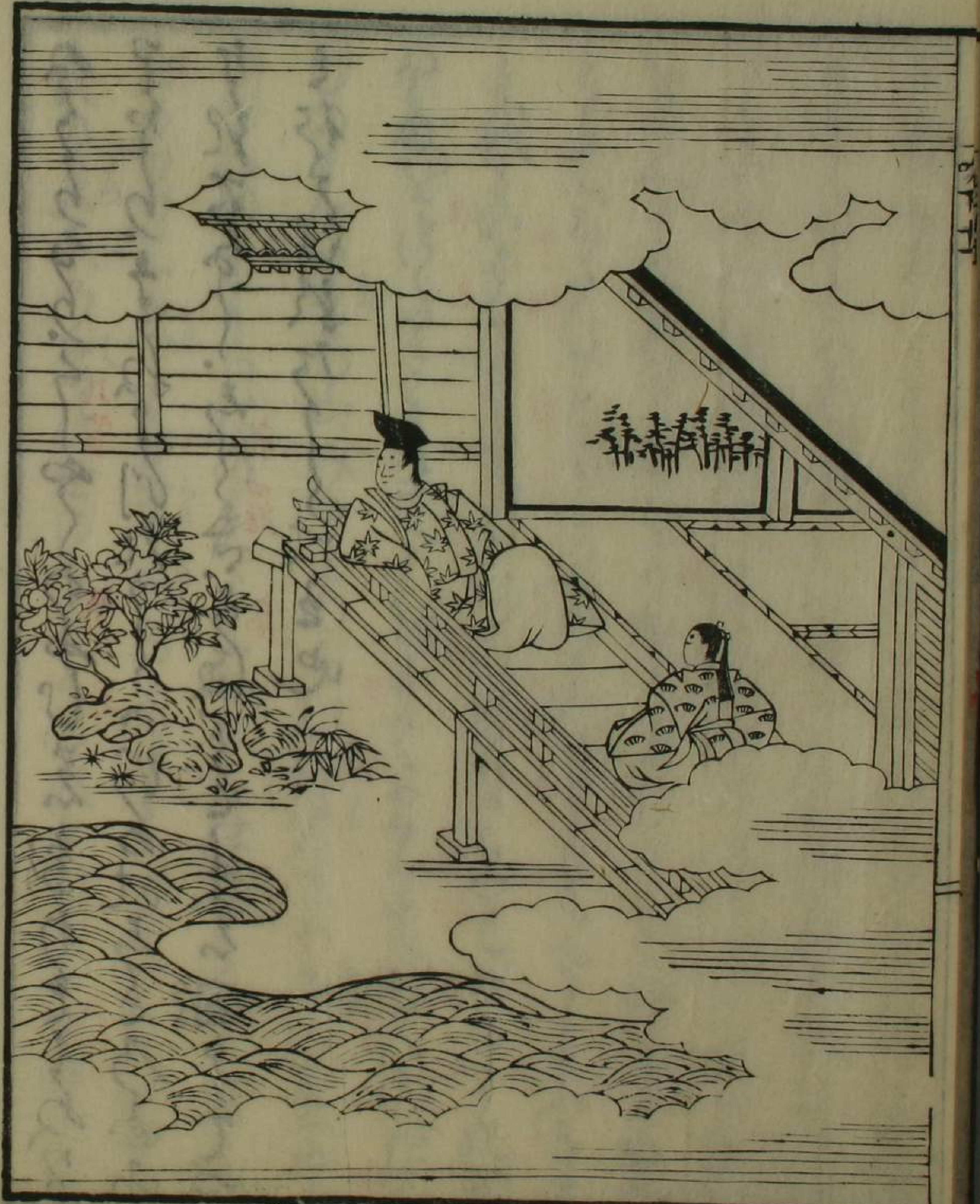
これおもとのさうりよりかくやりうき雨と
さしひりとめて。金こむ節りの瑠璃をはくりみ
がきさめん八丁ありよろこのくれなゐこりのついぢ
をきくさり。ちのくらなら゛ちしまたると経うろうあん
とつて。ちつらむ。を。はしらをおひそうりく。みとふきさと
りちさらりくとしそ。こむくねり。ちゃとめすうれお
かほをとくさるて。よりりくめくりて。ちんうち
むのえにハきう山。みるこのちむのをりハ東のらを
のらんの方りハ秋のらやし。水りハ松のくやしきそ
とめりてさくさぞ恭木。たくのすきさせにされいつなか
花の木来の紫。此世のするよに存とむなくあら

ぬらうすり。らしゃくあらむ花鸚鵡をそらぬろ
ちんらり。きよねをりたうしハはあれみさ乃あふ
たれろもし。あさきらぬ。ところよ花園中まそで
にたうむ花たくしつれ玉也

北のさいかいなりゆくろ君にはわかむすめのなく
よむすめはなかりせはみこみをかはみのとなを
さて住そてまうりて、殿みへきといつくなまほ
しまうつれさむすめのちくにはむすめはなく生は
くまへいぬ君をおるりもそれからふをもらくふ
ひらつよふに、わ生ひらりしてたくまのくるねわり
やくぬむすめいせは婚をそてまうらんとそつらやり
かことうれりすくめてよし、殿は一二万丁の田ふな

ひごん源氏物語ニ締の読ニヒゴンキトニ物アリ
ソノ文字ハタシカニ見エズ 見エテ見エズ

ぢられわか君のなるし風て
まのいとゝ二三十万のされおやひえん
とうぞやさめてもれうくりふくりしゝへしといそれ



北のかたも中門にはしり出てわか君にはわかむすめのかく
よめとなれはめつらしけれはみかとにもよろこひみなとも
うちとてそのまゝかへりて北のかたとひとつになりてはゝ
しうとうれしさもかきりなしむすめのかくれたにもむすめ中納言ハ
くわんをなし給ひておほくの宝を給はりけれはおもしろく思ふ
ひとへにたゝわかきみのかくしてこそふつきの人ともなり
まことにめてたきはいせの御恵にてすゑはんしやうそつきにけり
かことにかゝるめてたきことは一二万丁の田にな
りけるよろこひさかえてもみな君の御とく也
よりもらへしとなりける二三十万のこれあまたゝひえん
とうそくはしめてものかたりをよみうへしとそいそれ

みしをつかうまつる人、女三十人なり。めしとよりかみ
しもあはせて百余人なり。女どもうちあげくら
ゐぬまでは御前よりはじめて、はらからしく
のゐぬまでも御前よりおほくやうよそほひたるか
さうぞくどもくさ/\にてせんゆきさうたくさんそてをきれ
しきみしくはくみ田にいへども、なかの臣ぬかりき
すり目をきく川出るくみものかちてすする、ひと
ちらやく屋くたえたへとちくきさ川なへて四さ
れども、わとよりなりかへりくれ、山のもとよりいにゐ
のすくへみおもきなか川のそせかたなれやひとへ川よ一二
ゐとしぬかれし。こうくさまされるなか川がこひと

づよいとの十女房どもぬまゐしらくてなおかのまかりは
文はかりくいそてよきし。はくも示のへをむこれなら
すゑを示してよかりをへてじれまとをもなく
いろをおりくくさうかにてしもまくつとか
おりみし。山をかりはきをきかくとも。秋君の孫
くひ給ひんりのをいひはうらんといそくをつかゆまつり
なりくく。源氏の君の君いれしたは、なかの世よりいむ
まれをひとり人もおなしなれかかへくちやりめさ
てかうなへてもなへくりてもつかれみし。姫
さるよしみわそひまうしへなすりまはれおほかりくさ
御給はやこのさかて給ひてうはれむかへとりつ。

まゐりまへ(さえん)をはすゝいたり。わかうえをいかまよをし
へつかしこれらんの上手(そい)。出居にけさうしみて
山よりあかれたとも人〳〵よりてされはつゝしりひとり
あるして。楽所うたに女一ぬりのかむめあかくしれん
のむすめとも。たゝかまうれとも。ちふかうめりてえ
こ海つのりそて。かれかうたに。右近の将監そいよつね
ゆ川のさゑもんのすけのかう将かうちにたちむかく
いふかに(とう)かい川のさいつとまもあるよみ給へつまく
はかちのともまゐりはしさりつかかねいつと川〳〵そ。
まり川これのまつりとて人〳〵むかすゐのうし中川と
よもにおいらぬたうしの王ほりそれぐむ(まよ)とよ推し給

小君達(なり)。かれはまうりきつゝかうしもさや人〳〵
いそうしきうちよ何の宮そて。まうちとくしくさうし
と。まうし中川ちうのわりそて。せうたにうしくたし
えたはりしき海ふかそ。ゆうちくうつしうはいとて
めぐらく侍し。うれ(かい)しきこゝ乃きと給ぬいはかさあげの
さ海のわかうちたり。あまもり楽はうしなかりそ風をと
つしよ。猿しよそひてほねひる(い)かねよ。おちかうちて。
丈ちやうつりかきしうちたり。それよは(き)にてかく
さうしおしなみ(ナミ)くらちさかり。それよそひくこそ
そいるさうちあかり。それよそひてほくしのおとも
わよるさてうちて。其の色とはくして。(たち)取をらちう。

秋のりみちのしほりて御前いろ〳〵のつくりものして
こゝろことなるさいろとはくしはちをさゝめく
くろかう。かの菊の時ともあつくしれしやうにまいり。
あれはかうのいさうのなかいられおとゝ御しくみこのひ
おほいなりむすめの御めうらみかえあらそう。
あてうの君しもしこさ人すなん。かの給し。みこ
まうといふきうかはこられ。かのうへとおもしこさ人
のちうこあなさふむうちの殿人のうへにむかまれ給
ふくきこしらえそうし。かくのうちのなかめかうしゆ人
とひのく給なんと。かのうへうれしきよせうせしそうまこそ
あれ。いてさいかいかいて給うむ。その人くこれ〳〵いう

さや。とうとうゝはなのしまそたちあめうへうつくしきを
かりなとして。松をむすひてといとほりうつくしく
の。御さかへ給うへんそうのつゝさのともを見えとうとしそう
のこらうのけぬしのほかへんあそひあそのかしこ
さこしそうるとかしらは。いうあのうへんせよ。きみめん給
そりて。御あそひともこゝをしうあつるんなとしやうされ
あふさふかくもとこてり給ふはいまつやえうくり
まかはかりんうことに給はいつゝうれかうかうて
だまえやこれたまりのつくらられえうんはうあまりて
そうちのかりの給うれあらせて。たかう御心むさ。
物うさとはかりつ宜てせや。おもしくみまうの

淋本同
きいいて參るとま來
まいて人〳〵誤ニヤ
道日 追考フキハメテ人々カ

良岑少将ヲキリテ云ナルヘシ

御一本給トス

よ。らいあう君たちいんりのし。御すゝみもとものゐて
うすくれりのとし。まうけいろまたかゝりてかくして
くさ〴〵の筆。まうくさものゐてさそむさこく給へしもの
君たちりぞ。せんしの君れものんとんりんむりひも
のしたまん。さうしやうして色でやまうちりされよ
をむやはせゝと給ゑまよきし御りしぬむいそも
さ迎へ参るむ。ほまとうらめりに、さゐの御こし。わうゑ
りひはらはうまうりうり給ゑれは。みいと御兼とさすめ
御。わまてそ御風も参。りうしよまうるとをせい
しも南ふれやりすく。ゆふしし御りぬ君とれをゑ
そ。すりゝされなくうしをよ。りのし南ふ附よわわ

まうきれとりふくてあうちりまりつきくにひらゝゑ
の沢りさたちょりてらくもそけぬしいちてれよふゆ
りぬをとりふ。ゆきこ御さいくうくゝり。うすうちりをさて
うきのめんし御りくすまりよもれは。井のりことよ
ていも学えむとそてあん。ゆさやこそゝあてきりしてし。
あきうひくしうまうりと御つさうりつあすうよりとくい一日
くきろふくらすれくたべ志へけるあすりよろ給ら
しらう仍れいろ給まとやうあうる心いとけうあう
こ給。うきをる日りてめりしよゝ近てんとそてうらゆ
さまさうふこそや。君れ御みくよつる給へことも
うれてうあん。少将ひとの御れまんしの御らんを。

まうとかめかりけりつかはよ。すゝかしき川なるし。
おもしろき所よりかへらんとしけれは。いさ給へ
さゆるきくむすひのくにけれは。いとおかし
これ見とゝまりてそ。ゆきやすきもなく
まうをとゝ殿にまゐりて。いくしとゝめた。いと殿の侍ら
ねはえかゝらんつかまつらん。いつかいかの給へ。なら
まゝ九月九日かりみとまらん。猶さよゆきさいつみゆるう侍
殿いりのともよの給や。かくれのめしとまそいく
くるり給ふ。少将まてとゝさん。それまて思侍。みい
と殿のまうされいとけみいと殿すくもとも。そのめしいは
いかく立ち給かん。いさゝ殿へまうしとてかくく

いゝくるくてろく殿にゆるて。まうさるとまひ
めそく。此所と然いふまうさていそかれしきこと給
こゝまことの殿や。ともをもやいかや。をゆいなゝふるかる
まう所右大将のゆかく小こう女あさてかいけれはけら
あるうまれ給ふるあみ給はゆけりくさかるをもて
うのもとかろうかくとれしも。とれん思給さい侍
らむ。右大将るこうとそこれ。かやさら殿の殿けれと
まうり人給はりおうしの給けせんしのみまへへかゝる
ゆる見られうけそうくものかゝるととへゆるくとかゝ
まうやつうゆるゝさてなむ。ゆかまたいくこゝ給ふ
るとけりうくてものまゝまよいとのともとて。その川西なり。

はまてと給てしのきこえあるはえやうくさふらうをとて
えいてくらうりやしの一人はえりのをんし人こそ
の給れきはいとうしろやすかるをまうてこれ
きこえありとしさむりいとしらしとやかれたまへ
ふさこれとそかうぬなくてなるまうい高の放よ久
まそておきてつゐりのよはからしき夜よりのをむと
思ふとゝいうりおやつるくしむ女いかもとの給ら
人におねられ西紙屋にさふらふきこえけるとして
そのきんこ西そあてふ女ちくそらよあきそ物みも
ぬし給ぬらりのこきちんなちつ紙つよきん字と
いかゞんちく海あらさぬしたよまんみち思りの

給ふのふもおしなあんかくは、せらるよく給ひ給ふいれ
あるしをもちつよおやかん、むちそめはうく正月の節會
なくらよいは、いつくせんとみなまうりのてもをこともあ
きほらおしつあおりくそえあば、いかきくいへる
てむそ、正にいらくともむや御はつしきえへて、人々
ら史生のいをり、ぜん十ぬの曹らなるらまそれよ庭
て、給ものの人みちのしそのわらこるてせさ給ふも
とりのれどこうけよせさ勝よびけるれまへう
まうくしたつきのやえりくん。ほうりのねしをきむ
へぬおりにうむこゆえきよ知とめ給ひてだりう
をはいくしそいとうり西みもいく海えてわりなくま

つき帝よかの見まゐらせばはぢはうくれぬあまたふうくて
られそそちてかんたねはうそくとしてあはれし
さうぞくいとをせてかねはらとうじじうなかただ
給ふうつりゆくづえいらいじじうやうそいそう
給ふとんすく都のつとよきれともんとふよかうこま
るれうのやうあへし。ひろくにおつきてうへのおち
やとりうもとよひしとよめきそやうらくとよひし下よりそ
かうしと。母よとひきてゞうのそうふよらよくれ
むかりをいくいはれてそうそてさせく。給へれとたむも
てくうり給うんとと給

大将殿つくし川人よめりし給三所のきこえから
よきはこの作く忠よりてなそくしとんなと
めでたく思ふくよつきてこゆるふうにて
きみきのかはよりてそ給くかくもふきあるを
のこよけりけかく思のほかよつけ給思わするめ
つくいかならすてかくりのとこれめしとられ
しうもきこえめんをこうれまいりてこれもこうし
あしないむともふ給へしとてつりのこれと待しう
かされよさつりてあんいときこゆるのかりわしきふ
さはるくて源かねこそはよろこそ給ふともにな
んはつかさしの思いとこうましきこしれとのよまり

なかとやかへ
一本てうしあへトス
紺本てうと給へトス

みたりあるもれいけるせちあ人々かりんむまのか
ともかくもあはせさせてまうてんとこさえう小さきん
とてゆかり給めのかあるしのおもしとまりてまうと
中納言殿れいの御あふしの思ひひさしかはいら給ひて
これらうこそく給くみやまのそこしうきとおり
てあらうとそうちむかへて上も殿のみるきれひさ
しまよこころおはしくまし給ぬ夜くてまいりお
はみあふしつうまつらはかうけれとさまのくよ
かりてなほりのきもの給ありてあるさあはせ給へ
あそひ給はおかねらうもこうけるていとあはれなめて
ふれ人のうくこゆりもの乃給ひかふまうけりふまうこまく

あるまくしや。我君やさ

乃むくしさくろうすうは紙らうかくにはめてあしとみち
こくわりあし。か将ありしの至らてにたかうより
出りくいゑくめくもわりもかりもわくことのつとく
よくくりやちきとうて候りりしよこしなすくて。
しるとゑりよみしてすん。いそれちそてうけふひ
おうそ出りふ於色しりし。そいめむしもりありか。
まつしてことあかさやれとうくていこめなとか
りしよらむ。喜ゑの寺くみりのは孫めつくうふ。
いさくむりくゑむしの於をいうよ悦ふるを給
もむ。京よかりけしてむきのあかんやつく人事と
まむせを給のへあらし。あるしの忘くへなうてかしう。

口たよりにはまりふ
うけた由りりてか
しこまりたる事

けゆうくしむつしさわよめこころ侍りはいかとくつされ
さるらと起せ。字りりのわりてもやつ人をもはる
うゆうてうせりうかれとうくてこえり侍らそうくん
の。かくらみすらしみをことのみうとしたわくは
いふいのたくやりやなうんとそすくうとそくて
そくしねつ名人てては くしり。まかは里べくう
よるよりはいかもしこしかうら給ふ。かねられけてとう
しあし。はやしうの給かそへみへ候人あなみな給。
家中よかうしもせてとも。我君にしてせのくめしうれ
さむてしめ。喜ゑめくてかうしかんと。こちうめして。いそ
音かめん給へん。かみるちうそかうふとを。此のきとうり

まして人のとかめらるゝん。とあるまじきおもむけのかりやい
さ給ひぬるをしゝてくさゆへはされとうふ。さまにまつ川三
月三日のとくまうちとりつゝまうれりおわし
のゑまうらぬ三所の所おもおもふるゝのはしさるゝ
のうひとへく花のさまにことも物のさ給くやそ
とりもあやうりようへ物さゝて。うらとれみしい
もれなうゝの花はうらむみいれとくまうりく
さ物君花いとしむりむあんこうぞへやなれさう
ぬとかしさ。かうつくしやまぬさ。とわさ。さて
いみちりのまつ川。ことく十すこ日給ひ卯花。卯むの
いりをれのこゝにされつゝよゆうしもとうわらさ

こめりちのまとでくしたるさ夜めりくさの山海
河はらの院さり。院の物のすれおもしらむのくさい
をむかうひと給ひよともあうゝのくゝくれけてらしを
一しやく二をむぶらのゝもにろくろよ私にゝくゝ
さ夜くよいろとりて[illegible]さのおりのまうとさよふさ
むのゆかんをしさ。かつてたくまの我。ゆやみさまにりか
てふかい川いしきさうつよ給くいつめりつうしくとかり。
まらうとうちのゆかんとものゝ人を。少将のとものの人
よまんりとゝ人のかはさ。さかくかむしふれぬのむしくら
はふうやすまのやかはちつのほさゆりへやとのさくやよ
川ふやう山に人のそすわらり。そゆりかへ人かしとみを

とゝ。けふしくれなり。あまつかいすめのこゝさい人のふ
あるじからあるじのえらひたり。みむかよそひて
ともかさぶらふ四のくらひとゝえらみ。さそらく
とりのへくけやりそれぐがゆへにも給へ志と
をしそて。いつやしきあるしをと給ひくてはかりまし
ちぎりはしくてりぬぐんくの御まへの春し花と
をとを見給ひくなりたくのあそう花桜みのくこゝにて遊に
かれく
花ぞののよはひさかふるいのちなをまちつくれ
やしい給ふくみ哥くむ。少将林のくひとにゝさらつ
らぬるるかをやしにうつ鶯をといふくの花も

ゆくくさくらむ。あすしのまとくの川のさくこの魚は
ちとさうくなりつてかよもむ魚の手なれ
ほとつこゝろぬん。ちとうけ山花とりともに
あしたか御鳴くちもくの花のち花はなや
さむれあそふ雲氷くてあかしくの志てゝはすく花宿
よ庵まり世をくそてまくり給とて。それもみりしとこ
ろくかり河かれ花花。御遊ありとそてあそ人おと
のおして侍けり。ふくりさくとら給く。ふくおとろ
あさしかふを給てなりく此かさよ。まうらふぶ舞
よあからさこしむてたりり。それハ母うしなれうく
かけやと歌し花人のかのなむひもそ。桜の御つくみよ

こそあるまじけれとうらみくやさしくおもかしの君こそ
はかなくはいはろなみさせ給てこそよりしめたりける
さうこうつゝまれて。なさしうちりぬれはうたゝ
おもひむこともなん。おもはれしを給ひて。御まおもくいふ。
くてけるにこゑうちあはせあるかなりて恋何をあはせ
てうしあはせつゝあそびくらしけり。かねこゑんてそせち
こうれ。ねしむてたゝくつゝけるやうもくるしこと
うはりの給れとはさきてぬを。いとめでたくれを。
うきなれるをものありあそびつゝ御こしの給よおかくの
人のてぶむせうりある。ゆきやきさよふね夜のやかまり
まてきこゆひしあそびをおもんめでしきなるまし。

それはもさふいこそわくやうさりてなんかりける
ようふ。かねうくかりうきすよ。あるかきさりけると母
つくゞくあけられあなかひなうれとなよそふことは。
る弥つもそれぬやうくれ。あるなしの君にみともこゝろくく
かりうさ河よ。なとになのそれそおひいたまへ給うん。天
下のゆりのうちうちもひとりみうよいひるするをする
みなか人あなか河よなん。いまもなしやうさ給りのなん
ちゞとひとかた冷泉院はいは秋（あき）の池（け）の月のうつるぬい
ことやされもやいあつしの君けふいとまかく
昔の羽かれとうくふくれとの色ものもみうをとこえさ
人もなけきいなん。なみともあゝぬもはまるまてまてし

うまりゆくを世中よあるかたかる人をもうすうり
されハ心もとなくてハ世をもしらさてあらん。かはる宮よ
み給ふ事よ。ひとの流浪人をもむもとめくさる
さ。女をすくハ世かりそめのふしそてあふま也これ也
かなしと心おも何人の世はなれとも事ていはと世かりて
男をくるしうすれハ。たゝかきまもしくしかりくぬゆ
のよしれ女ハとも世かりくつれくあん仍めの仍先のそれ
女とみてこなくりおきハ河しさよくりよ世とりうる
物するれハしれもくと男みえけり。女婦くりみくり
つまくらんあるとみえあるしの君ハと世かりかすう中
みゆ。此つくさの上ね。さてハ宮内卿殿のみむめとも

たゝむまくくれくくらなよすむりのし給ひけ殿
の新。宮内卿の女君ありけれハ大将殿の君にまいらハさ
りのし給ふけり。地とく女あまく人よこよふくまかり
給へつま。其の中に侍もと男名七郎よありけり給ふ侍従
女の中にハ九よ河くり給すむいてこまれくりの
し給ひの女君をハまくい殿のあめ代あくさの人え咲
なくしく殿つきよ出くれこ出て給めれと おもか
しるは心くあゆすれ也。又あかゆしと志りみりく。
たえ人こさ出て給めるきやれいとあやまりかれり
また給り。此くるしんしめくく此にすんゆるさ
うく給ひそいてくやしくれ。たゝかくもかりいとあや

不動
フトウノ御名

しのたかのいちくれせくのみちうめとくくひらぬて。
おりくりのたりくうしす八給なりこそハいとめてく
うふ見、井くわかうちぬ色。此まいすりふくおそらし
しこうの此了思にこそ。なりくく世わくるきくハお
らしてしうくるをれとかりかくみ、思中川の世
のとおきくありよ、かくのかりて思をしくへあ
いさ給、ふ人のきてりの山より山人みくりりた
てぬいるうさ、少君北の中ふと源宰相のもと
しこのあまみちあそて、うて給りしを給へ
しふそ、おいのまれりの深ま思これを作りを、
せりくせりふまへしらまみくあるし乃君げふりゐ

ふるくらしきん、ますそふらけくありくにおほかね
とものみや、ふるきあけれなみ給ぞおりて、世わたる
野辺のわかな、中川のしのしなくやうつろひを
けひとしきもそくおれしやるかうのまくあやし
しかのこゑもきけ、しれあり、ひむりしおりくを海
のわかれ、花のちやしらくこまちちりかるを、むの
ちる花のりしやそてみるうちり、みやはみなえ流を
まそみち、きうし給いは花のちやしの名残まて
しかみちていは花の木いうをみそそのごとき也。いさ
こころふるくとものしれをみてすかうくれこそ
ましきむれすなり、かのふもしおりくさかな川の

しかるにかつくれぬとくのみちもいとくらくひらけて。
おもくみたりしらすハ絶なくこそハいとめつ
らかま。我よもちみを。武蔵みするかくおそろし
しころの此ま思にこそ。なりくせりくるまことハお
とうてしかろくむとれを所のかなつ思中河の世
のよのさらくれよ。のくしなかりて思をしらくあ
は世経。かへ歌おさりの山かし山人みくありた
てぬいるりと。かね我の中かも源宰相ねのまをと
しさのあまりもあそ。こて月終てりしま絶へ
しかてえ。おいのよしりの行まえされを作りと。
我りくせりふまへしらまかしたあそしの君げかいふる

ふるらしきん。よそふらけも春るらにおほかね
とものはいふきあけれ衣みなとせりて。せわとあり
野道の有らは中川のさやしもくまちつかりを
けひとしをもうくせれしやすかるのさくをやし
しうこえをそけしくれあり。ひむりしせりくを海
の有らり。花のちやしろくきまちちりかりまと。その
ミう花のりしちそるまつらり。まつやいみつさ流を
まそみちり。きつしほいは花のちやしのちる程にり。
しかみちてい花の木いうきかそ家でしまあ。いさ
こうふらしまりのしれをみしすりつくれとも
ともしせれまほり。きかしよせわさかる川の

わらは。をとこまちうかりみちたれたやしのさけぬと
しもつかひ。かずしらず。みやとかふかりてかかさる山とかゝら。
山かちともそて。とかれいのまさる紙はうくしたかやかもちれかと
木のくれみか。こしるしく。ゑのなかうゝにかりてめうりてぞう
のかきみつのちむのかりてこゝとに。しるしこふれのみとこ
さそこら。寝殿のをいをぬかくさたる山の中
くり。いろめしこむらしはつき。池のめくりに。花の林
めくりてたくみとも。ちゆひさらさきつゝに。あるのみ
まや。屋川らゝくしらう。御むま十つゝ
たかや。あり。たか十つゝたてへしたり

かしづきひめぎみは、母北のかたくもりして、はやく
とみことゝ、かくことに殿ばらもいとめでたく
てりみや、かゝり、こゝみ給ふかくしらはやくて大きにいみじ
思ひこれても、まして人は御めかしのまゝ、ことにいみじ
くまうでまうでおほしのまゝにめづらしく給ひぬ給ふく
少將このことらうけひとそゆまへるふく
給ひまゝ、海のかたられ花さうよなりぬ、え笙
花の給ひしよやしれみえう出給ふ、その日は御
よろしき、そのゆかりありまゝ、まうまうふくふゝ
よそへん、みなかくしの御花とも、はなとの人まゐい
のゝ人のことぬ、さらしのえくらしみとこれみれから

まうでさせ給ひぬ。御前の人のかみあげ女のつらきゝたり
給へれど、まことにいとめでたく、女のつらきかわら
むのおとこたち、ちいさきの給ひろきの御かへりともさき
給ふらしき、みなそくろうつくしきすれ、おほかいろつらえ
みなしろがね、おやのそうをとおやのいろいろら
ことおりせのちゞしこくうつら、かたれらえきけふあまら
つるし給ひて、とし九歳ばかりなる人十人かずあり
おほしめしつかはるゝのかたの御、おやのいろいろ
のおとこの一つゞえ、おとせのいろしこくうかいはしゝい
みなかけとひとしくて、とし十五歳ばかりなる
さしぐしして、かれしたる十人やくしよきをりには

青

かしこからひとさひめされは、まうくなりしてはく
てみつからう、かしこき殿にふとはいてあ、
てりうやまう、そとみ給かくしらはくてかたし
おむこれては、あしく人ゝおもかくしのきは、らむ
しくまうまつりおもしの君ふうきくたまひ給、
少将このくしらうらけひとそのまへりまふく
頭弁まてはこの御かたは花さりよありぬ、あしき
花の宴ましよ、こゝやしれみえはり出給ふ、その日は御
ようきて、その宿かつらやまふたち給ふ、わか
よそえて、みなかたはしの内裏しも、なとその人きい
のうへのさぬ、こうしのあさくさぬまかうみれは

ようつくさくいぬ、清ら人の御みるみ女のつきしやゝり
給かれて、まうれはしらうてつゝ、女のつきしやうら
むのおしこたまちむの給そひその女かん給ふも、きさ
袍しらしさ、ありく人めつしつる、おおいにそくつうそ
みのしよぬ、おやのそりと、おやのうは給ひから
こおつせのをく宿にこり、おもれつさこけふあもら、
つろし給くて、よし九寂しらしら八人十人かむし
おはしめりさうこし色このをく宿、おやのうは給り
のあこめ一うさみ、おとせのをく宿にこうまこしい
うみさけとひとしうさて、よし十五寂しらしらや
まひらしくもうさかれしき十人かくしともなりい

一おいは何をいニテ青
さトニ云フヘ下廿六丁ニ
何をきとくつる
さしとあり

みちのりとをくて、ゐ中の旅とこそなりつゞきて、
たちかへらしもつくへは、みちのほどまでとりすぎ、
ちかくて御前よういかゞ、かれ二人は御あそびのこと
かうるひとは、ちかくはのてあつれさいきつゝり。
とけるまへるはさかりのものを、とりあへずゑ
一よをへて、とをくらもうかよいうてくるまあ
やすらせは、ゆくこころの御かたよりふみつかふ
まつるは、めやすく浜へかへるへたちかくて
このをとをきゝて、君はのあそびあるとふみ
こひく寄つてあふらしつるみあけてふきえ
まゐらせくりつゝ、えんし給ふなり。少将

くやしうさへおもひやられて見てこのい
らせたまひ、ふきたつくれまつり給ひ、さよふくるまゝに
くしてあそびたまひけれと、海ばたのつゞみにて
おもしとへ聞こえむ、色をもあはれ、あけゆくほどに
花さそふ風をたよりて、吹てもとへをみなうへし
給ひて、ないものゝつくしてくまなうちまうり、風より
きこえて、ちりかうおれとてふところちかく、さ
きこえつゝなれ、ことゝく、かつれは、少将
歌舞の花みまちには、こゝろのさまあけぬれば、
さらはたかりける、あかつきのなごみ
青風のなれふたあそびつゝ、あなたはまつれる。

もろはよろこびれは、よみける
仲忠
行く水に花のちりかゝる時しもあらな
てとられつゝむとそおもふらんとけ
行正
風吹くとちらぬ花たに見しものを
ちりをぬらすれはるとの給へは、みやうた
桜河の女君あはせてたれ物我山のふもとに行くきて
て、ちるよのえたに、さくらそのさくら川のせくにそ
らん花よてふとおもふとをさへく。其の年きつけり
きこて
さくら
桜花ちりかゝれともあかつきよおもひまぬえたさ
なさ
しそうのはさ、とそしられわたるいはしくれなかりん

なかれ、あしてらみなて、ておもて、おも川をもあふ
よろし
仲忠
あめ霧よことはへはつれなれきや花の枝
たゆたふの月の華、少将
永頼
春風の吹あけよほりふ桜花くもの上人
をさせてたまれ、あるしの君
ゆくへ花ちりをりよぬえたゝされは、川
めくりあをなみのこそえたらちとけ
行正
桜花ちりかゝれ霧わかれかきやおとこま
てあかれふ桜にまたいらんかよみてさ
さくらもめてて、そこのふかへのまゝをしれ秋よ

とかいふめのこどもに、ちりかゝさ

人はそよそにみしかとも桜花あやしから

せうしやうのゝきまいれけ

白雲と見えし桜をまたぬ枝と

わかはさかゆむ。きよゆきか川

たそかれのひもうれれさくら花ゆかし雲

ふたあるそとよへく。おなしいへく、ひとよあをひ

あるそて。その日なる御ゆかりめさしてひとそ

てあやも物のうちもめつらかにさうしなり。そう

よもにひかよおなくかりしうさを海よ。花のふめとつ

して、みなそろうすにたゝくさうしくるる御中に

人八十人 紺本人十人トス

和名抄ニ漁翁ハ無良岐美

てりそこふえてうるすゝぬ綾くらうさへ人のこゝぬさ

うそくの人八十人さらつくさ清く。ゐとまきへ

まふてさうりてもゐかゝ。えてさう御物と清くり車

のとおとしれ君れとる給の大くせんもけ。かうし

あくゝみあく。えてさうしむよりかせてもとし

あり。えうさしれをいへぬゐりうあたりの

みなとりていふくさうり。あらしれ君とりくるひて。

あうりうへしめそろ物まつり。ゐくて三月十

二日より。けしめれみの日いてゝうり君くうら浜に

らへしふるれとのわんまいそ絹く。あまうつきめ

しつくゝしれ物かりせむしくさと給へしく。

ゆかりなきせまほしきの日のかくるこゝろのの
ゆきしなはたゝうらぶれくらきよりのほのかなる
のうき人しらら。ゆのはつゝよとりしてゆかしへと
にかゝりらら。ぶうともにをうきれてたとし多
されつてまうり。くてまいの君さらはおとゝはさし
り人をくば中えうとゝけたにおそひらしてゆか
それはゆかさゝらばりゝもよ。おまれたくれいとひ
とみひくらゝゆく。こゝらゝまと。かねみくゞれ
くみ中とも。なすゝよむるうゝるましらるはみしよく
らひりなといふとおゝしれまうらおらしひく
くなへのな乃らら。はこゝとゝとゝのまゝゝう

なかゝのこれは。なくさめてまてゆかりに。ととく
らうしなやく
たと親のなくらむ人の心ありへやまさりしも
世てあまれるくれは。かね
さてよ君なすれなりくるふ里は名をも
ならんやこれくれは。とふなうくれ。日ころふさ
ぬ。あそしの君。うくやしろこ雨り。いはなのあるを
ゆゑのひ絶へと。しれともならにある絶えとこの
さひすれんうくてのこおくしゆくなんとゆ給せ
と。さくりの絶へこ人くなもおくぬと。ゆめ
とかりしよ。なをさもなる歌なるつくねくこれそう

よ。はしひちらの心くたりく紙そへてみえしれ思
ゑやこゝろともとつゝ様くくりれハちりハ
た海りすくく也。さうすら思。とハ海さふ
みそて
くも地をはつゝ様く機ん海くよあそふ
みるのともふあくもや。少将
就るみる。とくゝのりも帰てこそくま覚ん
たとえて思りとも世見。様さまさ
君とりていつれこゝろん流りともみるさそ
ひよらしみやくるみそ逢 取あそひあくはな
ここれみん地形そつたりさ地く。志卯のひゝ川

これそり。めくりハなしゝき志すとも あかくさほり。
しらつてみしろ如ことりれあ川かく。志川くさ
なはさりしわりまふりてみられつ(はつ)かれれ。お
まのはとともあかさつわくわれさ川そつよく
をわしさり。三月中の十日たらふ。あちの家
よふちの花ろし紛君くらつく紛。れさそく
いよれあけれあ紙さ志くつうえそ。ほやれらくろ
こさぬ。もそのつかの下りそそ。まつれくの名海らそむ
のそらりくろその緒とつかくおりかむむまそ
ひ九人。むしされのさぬ志くさぬのしらそ海さ
て。宮あり九人てはれつゆのか。まちく世んれせん

御前にハおもてれそうらともハあはれなるにやうすれりさ
ねさ。いかにし給ふものけしきもよハ。文のゆるのひと十人。
きこゆるのかりハのくんれさぬのやうすれりけさかり
ハに人きこえのくんのさぬやうすれりくさそうらうそのそ
こらの紀伊守と藤人ゆとひそうら人ゆれハこのみ
将ぎしのうたそうらうとてつゆそ。かれかけれはうかり。
出のつくさとも出れハくゆうして給ふ。われハ文
よろこひ給ふ。らくてみるつさより給ふ。その日れ
むかしけ。そのめにつくりまり。えんせい
御前出のうみゆくよ。さてむのかしこそこちさまさ
むのさく給ひさのつぶさとりしこちしこゆかりん

ともれ人のまへこにまそまてしうけらしかよ
てを。むかんそしくさうて。守のめしかねうりの給く
さらまつりせうと。えうをしゆいしさうそけうか。
かねく領を給はそくさむとゆりふ給へしうとも。
ゆりひそたとて給しよこれかさあけの文給うけ
し御りまくなむ。紳乃御りくにさふりのく給
しを。ゆハうにいくらうて給し。身つくしそとかふ
まへし。私とよるん。せとうりふせう守のめし此の文
よまらりこくりせそ。えらいらんと御いうかし見こそ
あらうれ。いくよ京よハなふとうあらん。おさあかう
されのうえ乃をうりもうくかゝ。ゆうくそこそこえ

のつかひとりの。いとしほられてのちの。ゆゑや。せちやけことに
なくさむかたもおほえ給はすなりていくゆか
ある中人によろこひなからかく侍。中将殿もうけひに
やはかくしはすらん。少将まうてつかうまつる中将殿よりいたう
まかりておはしまし。京にてかれなむかしは雪の花
のうつるへとあんないしてよそれとてまいらせん物
れ孫ともうさわうせくかりてきしひくよかりまてく。
まつらやまと斉かそうしからのもせを拠りて。松の
みよせをしかとは題を。らかのみかれぬし
菊の花さかせ給ふるをうつくへてそ雲ゐしくらいもの思
分へりおとる。河かしの思

菊殿のしなへるやうなりくまわたりとよらかひゑ
松のねしもしそえみ。[illegible]

仲忠

菊の花そめなく給ゆをとかうぬれいきさのを
むらさき雲よいみてある。少将

永頼

みさはかうわようまつる菊の花かけちへかく
ちかわかうれ。らうちをけ

行正

まつゆていつまてをしと菊乃花うれなし松
のと思ひにておもんへ。らふのこゝむかるる

権守

菊の花しまろ松のかうとりむそ川みよ
おもしけるきくく。しらんのえもやせんやゆかさ

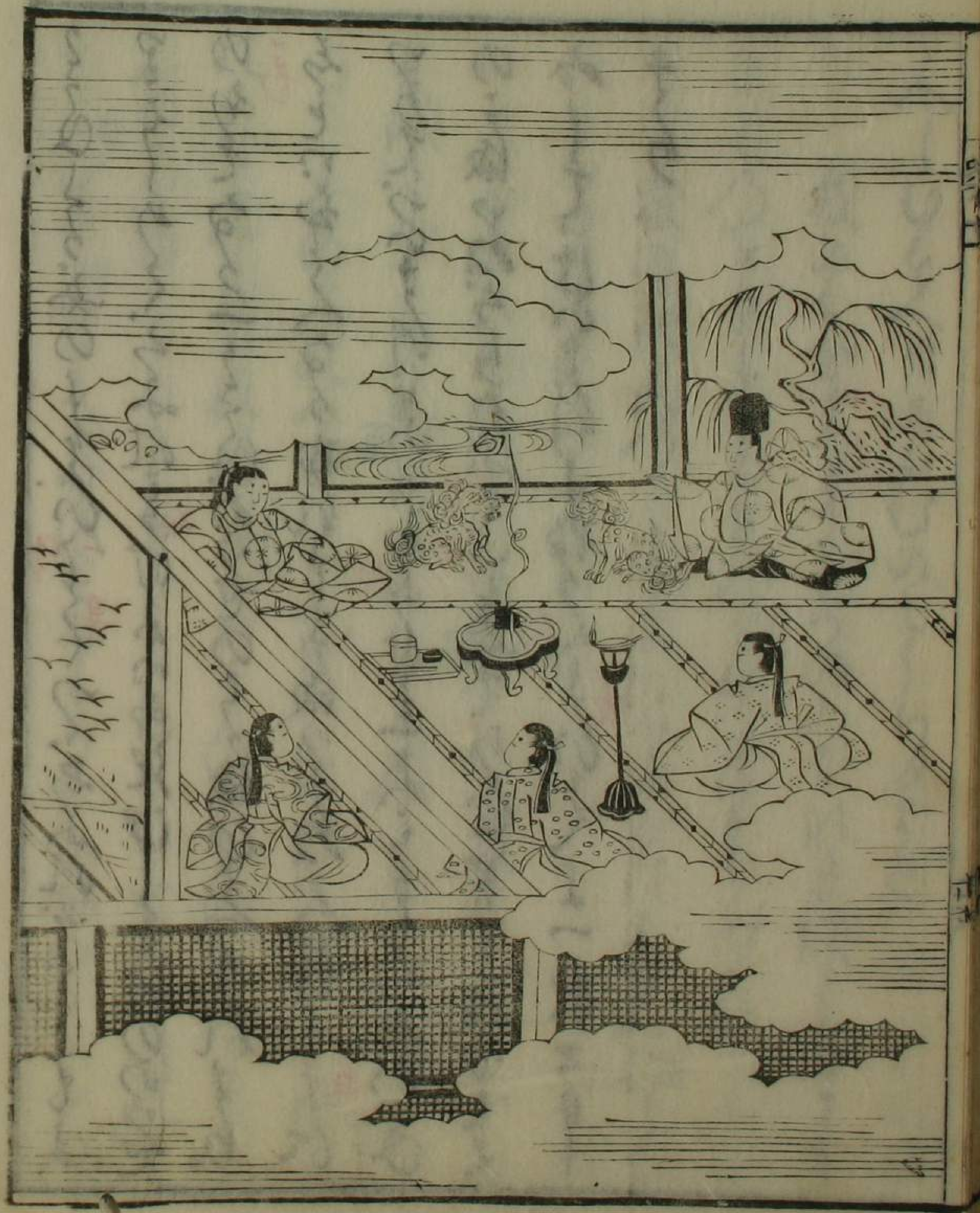
将監

しくえのいうもみゆるく菊の花うれなる水を

人しらへは、うらむのそらちかさ
萩のしがらまるゝのおとれまではしあまり
なきはるゝもこそしれ、うらむのそらけり
萩の花ゑりまうぬにかへりは来さへ行く
たゆかゆうれ、うふのもとけ
めかりは来経るは庵ぬれと萩れとれ名ふさ
来代てくてらもれ、ものゝとへをまけ
来のゑめれみさいよめかふ萩ちものとれかち
れ萩とみてまれ、ねもそあそひくれ、我のの日乃
ろきのやゝくさくもかゝろ、三ちの国れを
とこらむのうみまで、おゐさゝへつゝちみのうこ夜

きてゆくらゝ女のもとより一ぐくつ、ゑんれぞろともよ
思ろしめく、うふれもけめいふ花もしそれのあさ
のかそうすう一らても、おりせのら夜ひとへ、それより
ゑとはちくへるう物れとし夜りぬ人ねしけるに
いりて、づいはけるまに、ねさけ三天うられゑるゆ
の夜はなぶちかゞていゑへてらむとうれなそく
みして、流いけるよねうくしひらくよ一夜とりし
きけり

かちいのゑかわいたちいそくのかくりとおゑかふ
りくさりりあるかへはにのそれをてるすに地し
しろき苔井ともゝりてそくりさうかう木
れ道乃いさ紙を紀をあいとも紙をれ道し
かゞみをいけ乃あろさきとこ小地としてあの
ころ紀ことかゞみのゆりてふ地くしいう月れそう
をうしくんくろりのつくくしてこけにろうと志
をしゐいしきのいけれくようろてうたうさいへ
うのれく三そそ里めくりよ苔うくれる女めゑめ
くうてきそるまし地くの地くり、かうれ花乃志うとく
よう、は如やう梅とも手そてそくし・ういあらくれさよ



らゐ君、ゆりしろぶよしゝぬうちしろさしまへく。
さんよちつきれとまうり、ゆくのかうしたまふ
ちれ花をさしまうしまうり。ゆまへしにそゝ記と
をまうりもうしかう、おもちの花ゆわりの枝ちむ
のえくさうせくゝこむしく蘭りれくいそにくゑ給
ゝ寺のあいかなく。まえぬゆ乃ゝ酒ん是さら
以後してはつりせよりく。屋ゆへし奇まゝゝ是へ
早ゝ三月晦日小なりぬれど。まへ人さちくう給
おんとす。あるしの来ゝぬゆ川りの給へくの
なうり給へなまれゝのちうぬうと。そのゝはのゝの
せゝおかやりてあるへ拘るしの京にもよあるへう

一、ヒロカ子ノハタコ——
八多籠（ハタゴ）ラウ云々ノ所ニ引ベシ　廿何万葉二ノ卅一丁
心バヘハ心葉ニテヘノ字衍ナルヘシ

むかんそてあつゝんゝおんかりふとれなとくめてせう
出よ。まちゝぬゆ川ゆりわ舟ゆ給ちうのつきゆかりく給
給りつゝれさ百こうへけうあつもちとおんせう
給わんえつあつとも、わつ君の世おん忘さく乃
もちゆらへハ。屋むくしゆりいて舟ことまとは
人まもうてへまゝぬゆ川てうせきすちれとほくま
忘ろゝぬのくえそこひとちを山のそ
ゑくみをんくぞれよりしあやしれ物ぬとむけ
忘ろゝぬのゆまよらむのゆひくゝとれくもつゝ
それゆのこりあうせちらちんのむすうりとひとうけ。
あるせされ物ちむとゆあしやうよ。ちむよ叔うせ。

心バヘハ心葉ニテペノ字
行ナルヘシ

らかすゞ。ゆりしろうかよあくのうつ山しろちさまさまへとく。
さんよりつされとまつり。ゆくのちからなしそとふ
ちれ花かうしきうしまちり。ゆかへとにそて見と
をまりうしうしうら。舟ちの花ゆかり乃桜らむ
のえくさらせくこむく萬りれうくいをにくら給
く奇の多いり紀らく。ま見のゆ川さ酒んは宮うら
此鏡しして、かつきとりらく。屋ゆさ奇ままへ
見三月每日小すりぬれた。ましへちうう給
船んとす。あるかし乃きさのゆ川りの緒へくの
うりほつよ花のらくたりぬるど。そのくはりの
せしゝかやりてあそひ物るとの京はとよきつへう

むかんとてまつくんと船んせりふとどれかくめてせう
出よ。また乃ゆ川ゆりわ海きさりいつろゆまろう給
待りづゝれさ百さうつけりわうちらとかん門より
此待りん。さうあうさとも。わうあの此かん之さく乃
もさら待うい。屋もく〳〵ゆりいて海ことをと待う
んみすりくてまた乃ゆ川てうしせさみするうしたくま
物よひとあり花らうのれらくこひとうを。山めふ
とくみもくく。それようしあやかん物うてられて。
さうさのの山ほよらむのゆひかりとぞれくはるの
れゆのこうりあらせしうぢちんの女まうりこひとうけ。
あそせされ物ちむとゆゆうしやうよ。ちゝむよあそせ。

ちやうしのくのえうりさうりみとくよりこれしるふ
へいれくのうのうみとくとひひえものさ海みえくれ
て。ちむのゆのこうりみれつせうらをつうれよりひ
とくけ。つくのうれつゝ紙。あかしうり。よれゐ
ともとと三十あまりさてつれくもをつゝの山まよ
ゆかせてゆかりゆのこにあかせてりゝ海のうくを
あらしろうもちうりしていくあつせされ物紙あまれ
くらよしちむのそえまよつくまさ花をつまくだあまり
うくあり川めくぶものゆ紙あつとりよはかうりもへ心
とゆうしきん。あゆさやうる紙あゝのみすへをれよ
ゐめくのいとをもきえひ。つてうるまゆりしうき物もをひ

きえて。ぐそりうゝ紙つてみてうへてくへをつてみて。
みなのめ船し。ちむのあうりあ川よ。たるのゝこいか
をはくつを山ま。たるまのこよなかりるまのつかはをに。
あかうの物紙いれく。わさゆひるとしてに忘れう
おくみあこくんとうりしてそ。みとうるつよゆ紙しもを
しうり。みそあ川ひとうけ。こゝうつたれ紙きまひのお
かんさきくとも。うりよのかり給へし。一日よりを
まえひさ給へとくく。こしまえいつくよあうり。うれ
さ物とも女れしそひあをうるひつて。まうりきそうり。
あるつく物あ。たうりれと扇くのみちゆまれさ
けやうさけりうし六ちうりなるつうを日中紙忘の

ゑうかはのうへにれたくくりたるくつのはなを
うけよはらくとあらくるまをくれらしはなくしれ
うぬとなるはらくはうきにはなれくたくはなをさ
つまづくるくみれはゐ給ふあくとさきつくろうのむ
ちをひとつの手さしてつまれとはなちはう川にあ
ふこひとめつくるあり。お将よくろうけのむおふけ
あうおさつりたるあくさむらにつきなしてわあう
しにてうまりはみしくすみたまへこれはおまへしさ風の
御ゐさしうらのまへ川にそてまつるものはひとくはたるよ
せりあさくけつるめしなむさにはなせくらふて
らぬつましりぢくこふさうけふみちのはとのかき

てよれむさにはなせくらふ、御めよるとあり
二百石の船二そうづゝ三百ありとそゆるされよまゐ
げゐりのとまよしりてめぐりて、ものゝてらはあ
いまちつくる津ろうめくりてあるまいりものふくなれ
こうまいてたのとくとうりちてむくれいひのり
たくく魚りいかれていみ袋てさ、ひたるれとして
をうれらいせのしらいめん八丁、づゝちつさいれなら
くれよそいくびとありてよゐやいなるむるさかさ
れらくよそくつてたくめ袋てり、百六十のくらを
まゐこれを小者やよくらしおやみしきれぬさ
さいてうまれて、むのとひしうつきてくらゐさめ

うかひ 一本うかひたかひ 異本曰

わらくちからうちまきあわせうしを三十ばかりゐて、
いほしともあ川る里百人ばかりあ川まりて、こと
しのなりたる。こゝかしこにくしきかしこむいかしき
あやりてれとうふりのとも。あ川まりてあいゆ川
まいりせうしくかりゐとことを四十人ばかりゐる
いくさいかむきてゝのらふさてまいるさへく
いおとしれてさもあ川さのまいるたいまゐりたまふ
のこともおつまりくまつてこそ、まいるにく
あるのさうれかゞ[illegible]つとくもなえんかや
まれむさ二十つゝめしかんしよそてまりあ川か
まとものくまくさうくいうふうたたちたか十ばかり

えんしりやうしとも十ばかりゐてむさせつ
うしくてうふうれいゆかいのおほゐとのへとまうそ
くゞそれのかたのあしさとのたてゝいひしきさゝ
のこれとらるのかつまうろかのにしてあらめく。
みあるれしくたかいひしきられうしくれさるう
しとものかいくいゆかのこれありけせくいひそう
らまくらせいひよられにてそてちうすひとまり
よ女とも八人ありてらうとのしらまそうれいみす
そこるのかりるへおすしまうれるくさるゝれるさ
ねしの抄とれくまくいけし一所のさましめれうら
いやまくあけつるゝにまかのこ構えおかの二さ新

あ一本 一と 紺本同
道曰一斗五升ニヤ
道考ニ云ヘバ一升ト アリシヨリ見テヨミ誤リテ一斗五升トヨミツレシナルヘシ…一斗ヲ五升

しもつかへ、すさはほかひのせゝくゐきのつくゑのれ
まうのよまれいへしれ、とりのことなしれ流ゝ
八りうたいまれゝの所、く女せうかてうく、六。
さかとの十石いるかめともはたちはかりすゑて、
さけつくりたり。すひしほつけものおなしこと
したり。にへとの、うをとりなともあり。つくりもの所、さいく
三十人はかりゐて、ちむすはうしたむしてわりこ
をしきつくゑともなといろいろにつくる。
ろくろしもゐて、おなしものともひきつくる。
いもしのところ、いものともいとおほくいたり。
いものしのこともおほかり。

ところいなり。あかゝねのゆをわかしつゝ、しろかねの
まうしてえこことりのくろかねの山
かねのをとかして、つゝみれの
くろかねのかちやあり。たくみ二十人はかり
まりくふよりのたくみれとも
おりものゝ所、はたものともたてゝおり
てたくみのりて、おなしものともいろいろに
めとのことも十人あまり、女とももたくみのりて
わかれたり。そめくさのそめたり
ふかきもにくふすく、すくにものもすくれ
わらはもよめのこともみなりちて、やまひさあり

つゝこれはころものはじめにてころも千人のちからにてあれこ是

千人のちからはつまむまくへとこれにちからくこそこれ

とまりくらりて、ことしくこれよ。地くこ女うち

てみかうり。これはそう地の衣めくうれさ地わさかう

むらもてや。あこめつまこうくて衣女も九人ちから

あまたく。多くのものゝうちよりうちまはぬひもの

ふちより、ちから九人ちから手ていろくのものゝ

是これをいとのあやはちから九人ちから手て。糸から

あやおりなしでごとくれを。おりものゝこともれはと

なまじさことに紗おりけらしくみぎしきさ

くみさをれらかみそいかくみそめしこれはしんでん小

のちみまつりごとのそはほとして、まれつれともまさく

りのまつり、うらちら十人がらくは人、作人は人あり。

ちにはそくの色くそれちうちあそぞ。あけられこと

とも申うり。ちてに志れ大そうれぬしいまぞうられ

まへり地のこと。も二百人からうてそ。物いでみかと

くてなにほけの次ありへ。地かんたうとも。ふくさ

まうて人くにそてまうり縫ひんとで。地がりて出て

地かり又縫。志てちう里ねいおうさ志よつうみ

のちむ縫ものうさ乃多よいて縫そうくぐうこれを

むとありつきてろ中うち志んけそ縫てつくれ文のさ

しぬきさ。おやうつのつれしらさ。ほそ世のうそ画とう

むかしのさくらやあれはてゝさかりてなうけ
まれなくをつりおほいきたまひおほくそろ
らいけくの玉をかふゆいてすくてはかんともれんいふ
おほきさくつくるみおかけむまよの子そ御たり
とくてられなりけいおほく宝いひらくことも。ここけ
めくもさせまつりて洋人の御よ。みいるわそ
せれともつよ。うたゝみかれまことやせふ
こふ代ともとたらさつくくこゝみてらえう
らすれ給てめてしの春
いつみまいられはともあて花のあらしく
宰相中将

永頼
春の夜の花のかけにうつろへる月のおもてに
よるさへまさりけれ。なかゝり
仲忠
春ふかく花の錦を遣りくらむ花の錦ゆくんをと
見るも惜しかりいあるをや。落ちもすけ
行正
花にて風をおもひこまかなくわえち
のよしそよりすれなむとてかんわてまつる
まするらしのよせて。たゆたしまふの給れて。さ
御かうきもてはる人あかかへ。なかたし雨ふりて給て。
そこにあそひせさらし給て。くる給そかね
永礼
あかれみくかへのよこゝろのやまさしは
春すてあるはいしてまし。あすしの春

年をへてなくなれりてふ玉の乞ぬる
めづらしき海の川のしぶきて
仲忠
黒つれなきも流れあらせは玉いづくし
海くいつくもかうし露うすけ
行正
玉いつるさすゆし河くはわたるとも流るらは
せぬころ人わかれおもてみなそうね

三月つごもりの日になりて、春をゝしむこゝろをよませ
て、春ごとに歌よみける人々ありしに、ものゝこゝろ
ことばにて、つらゆき、みつねの日のくれにおもひのこし
たる。うたをとはれしかば、ものあはれにたえずおもひけ
れば、かの人々も花ちりて、うらみ
をみよ。春ぞわかれむとする題をよみて、よそなりけ
る。つらゆき。かね
みな人の花のかげにてくらしつゝ春をしむ
みかへりみむとぞおもふ
みなかみの花のかげなるはなみちぬるをとこそ
そ春はくれぬる。あすはなにならむとすらむ

河の水かみにゐて、人々は春のなごり
をゝしむ。かはらまで
花は春をゝしむことをのべていひつゝ
いふほどに、世の中はたのしきあはれ
春のけしきはいつもかはらずしてこそ
とをしものを。けふの事
いつもこよひもよみてぬ春をしむ
ころのことをたれ。こよひのかぎり
ゆくかひして春をしむ春のかぎりをも
なげくかな。うらむことをしけるものを。
さりとてもまたなげくもの

三月つごもり日になりて。まうでさせおはしまさ
て。主殿におほせて。よろしき女房のこゝろ
ことなるを召して。其日のさかりの花のこと
ども。桜のこゝろをとはせ給ひける。御けしき
ありて。おもしろき花のさかりにてさぶら
ふを。御覧じて。こゝろばへをきこえさせけれ
ば。絵にかゝせ

永頼 あまたの花のかげにて歌よみける
みな人そこにあり。まゐり
きて見し花のかげをこゝろにしみて
そ歌はよまるゝ。あすはかならずなど

河のほとりをあるきけるに。かの家はなれ
ども川は桜のさかりにて
桜に歌をよみてなん。さくらの花をこ
ゝろにしるし世の中にたえて桜のなかりせ
ば。春の心はのどけからまし。となん
よみける。又人の歌。ちればこそいとゞ
桜はめでたけれ。うき世になにか久しかる
べき。とて。その木の下はたちてかへる
に。日ぐれになりぬ。御ともなる人。酒を
もたせて。野よりいでたり。この酒をの
みてむとて。よき所をもとめゆくに。
あまの川といふ所にいたりぬ。みこに馬
のかみおほみきまゐる。みこののたまひけ
る。かた野を狩りて天の川のほとりにいたる
をだいにて歌よみて杯はさせ

の人まゐりし女はおやのうちにかへり入て
くおそひおはしまして卯月一日よりみちかり
給ふ。かさあけの女、御そこそらう給ふ。その日はのちの
つとめてもくらくなるほど、御かうらしはれはなはだし
おやのかた極し。おやのもとはまうさぬ。そのりの
わ給ふとはさしぬ。たゝうのかのおやはわたくし申とう
さねつてそまうてける。すれ極し、なほまへしにかはりに
く思ふ十まへとはそうするて、かくまさしやうらいは
しくらぬ。おほまへりふさいゆふあけさうらふく
ぶかりけれ。うつまのかさ、わすれふいそくらぬ給ふとを
て。極く文にはよくおのゝ給へさせてはしけにたつり

て、かうしきやうきあけはこもり、国のつくしまゝい
てゆきこく給ひ、みくてりのくねゐて極しむ給て
みなくらうはあはせてありもしつ、目ところわらゆけ
いつそうはまゐふたりは、あまりの君たちつとまとりて、
うくはさまふ
うつゝかくそ気にまかせおほさそふかしもやちさ
まし人のおほゆくらむ。かの将
永頼
太人はしも君とこかつらふしもをやまされとも
真さしもれたりしと。さてう
仲忠
立かりあわむしそ思ふ真衣ゆかたる袖に
うつさびくわりらしさ

行正
夏衣たつ川そひのもとひしこそはなしむる
ことものうへにさしも川のほとりにくも待しは
われとて
松方
山さとはかくれてひとりあるくそ世のなかをかくしつゝ
さくひさしくありてそらにもちかくさ
うくつらあはれとひしきわかれ路にこゝろさしに
とかくしつゝへだてられとおもひけ
夏せしはたちんなく家のことゝぬまにあふつき
またしられてふかきよそにゆけもて川
初瀬女のかくれそにあらむとてをしむれはまたとう
月よりやうやうふとまゐりぬれどそのうつゝをまたいはむ

まねくあかれしにはたゝかり物かたいそのやうにまさら
くれはとよそてはつらきはれおもはそものおもひとさそうそ
さてあらされあきのことぬこゝろみやのへとものむ
まー一にふてらつきはしとまうこされはまてゝ海
あそひつゝいそつおくりみなかきのすくへさり。
うくてゝりの世かせしうむまよとものかくまくいそく
かはひとつくりの徒はりしもよらむときうちま
ひはにきみやはりか宮なの三和よめさてふえ
そくしそかつわりあるかれそのうそしてひらかるる
れゝのものひとすれえこゝのこゝり、あるる
こそみさゝめそれてうちあとすれそこのくへりしさ

朱点ヲ紺本ニハカケズ

一やうくじ[illegible]いのりをさせてう。かねうりい
今はそのしるしはうれしく衣袖のうらにやそ
志州のうけれ。きてうめさらりしらるにに
古[illegible]よ来[illegible]めきしにとりうれしと思うれ
まつらん人をとこそ思へらるとおけりいこるのれいとと
浅き事となりけり
長りしよめ思ふなにはあり[illegible]れも夜の事と
ことはれとしきうらう。みちをしてそて[illegible]の名物と
河う名はやさて[illegible]うしきた。なら河きせの
たらみまて人つくまて[illegible]ことをに[illegible]
りう[illegible]てもて[illegible]あるし[illegible]

文の人をおきみくるのおし[illegible]のくらとそそ利て
みおくりと[illegible]を[illegible]のりとやそて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
もの。これを[illegible]
[illegible]
[illegible]

ときはなるものの人よりもまさりの深く思ふもなてな
らんでゆりのまづゆきらかみ西抱女乃よしは一くさ
ねつくかはをそへてまつり。ことりしる紙となぬ五州
用ひつよこぬ道つくそてまつり給。北とよりの
このぬしにそり給すもとのそとにこやことりき
とゝこ思ふよこと西。かね

永頼
あかしもはせ花ともあまし歌るて思すかあ
こ給りし紀みして。ちくう

仲忠
わるしまあてし紀抱紙歌るせ花のこれと
わるくうれしさらうきけこあくさ行しみく

行正
文学よきふんなれかる心みからもよるこの

川そひにゆくとはすれど。あかずしの志
行人のことしとめぬるみつを行しみ
よりうるかへにとすれかも。ことのぬし
なれども山の瀬の川のさ紀川をそはそく。こ
まよいあるれぬる所。なとも飛見えよ行しとかうして
世にわかれわの思ふく。京の人いのおかうお中の人いく
まち給。さて日月日月ちらうふきそてなん。忠安
みよおりしおもふかもか。京内のぬしみあか
しもさて思給てうく。思ふよいうろ。いれにく
春ふく川ざそりの北見もよくもよいわをの
木のはかく思給くやすき花へれぬしのうち

かくて、いとよき海のほとりのかしこきによやまさ
よの常よりこよなう響きまさらん。かねまされと
これとのたまふとく

山里によその流れをわたりてはくらぶれと

とりよそへたるつもりし。文用心のぬし

この緒くらべこふかきとりなくすえくもすれはあり

をあられと思ふものゆゑそ。あるところかね文用心
のゆふよこちなれこうしおほくそはあそまもりて給ふ
給ふすけなと気色しみなしてあそらはうつしく為
へらうすむるとあれぬかくて出へてこれあそち
わすいふしろ物。あそうらはへくよしそてまつり

給ふ。かねまさはうちよろこびのよしこゝに山すみはたかね為
よ。わらこはまう用心に。かうに。はなれてここちそらしめ
く。秋ことくのこまかなる物みなそうへ給。さてう
さりとものゝ心まはうちとけに。ちりこはさうれ給ふよ。
ともれとこうちざめてこまけれ物は少将よ。宮
とり帝ののゆ中よらくかりける物はうちふかわり
てまさりてかうすけはめとこもわやとなりき
れた。船はそうとうよとこと山ずみはいかうの給よわり
こはきかのなよ。さりとこまりそう給へこまむものの
りのちくりなるさて左大将なりは。ゆるくかうち
れやくれともり給ふ。おて宮よ。こゝむのれことひ

エモノセウハ頼純カ

せしそてまつり給て、ここらしめし、いとかしくれ思ふ生
まさり給ふものしる。あるりよ。左大将のせうとれうえん。君
おねすさらもてさらふて給とさらし給、おもくひとし
うえとせさらつるあるいくなてはへりめり。はた三人
これとゑ兵衛とゐうちりのきりつん。この君 正頼
月ごろみしきらつれは、みこの給ふくおもてあら
んかしそて、すゑのよれはしさうをさく。すゑらくに
とおもし迎てあいまつり、むかしから心をおもい給
えて、いとよ母宮のつ給ひきつれは、たのむ 永頼 今
よつるよなむ。かの将をえれたてらし。こかなふかく 粉河 不審
ひんとすむとなりふ給へてこの院のそうよ海らり

さりしを、いやしき人よりえ給へつるそて、ゑちうの
かみこぞりつゝをうしてあるむすめ、ちうの
つかへしゆくやられ、そやかしけちりぬ。わかさり
のかれはまつりとへ給つくりするひのさ孫ゆゑ 椽
とふせうのこともまごにりの君給ひんしてこかは 孫 源氏
のみちのかはりふなんとみ給ひり。そこにつかされ
まうりと人わ川のくり侍しをこの川をわたりて海ら
つまりくはへよ。この君一日二日ありてむまうし 馬牛
もうしやをとめくはへりのかうをめ給ひしうは、
ゑりりてみ給へしよりとあつさへてうたえりとれ
いはれたりやうよすみ、このむ八丁のかとよこたく

くせしそてまつり給て、こうしめし、れいよりくは思ひ
まうり給ひしとしろあはりよ、たゝ御つのせうれうん
おほうすかしきこえて御ところし給、ゆるくひとし
うちとせさりつゝおそいくたりへうぬり。此三人
これらを見物をもいろいろのしきりつゝんこの御
月ごろはみてさりつれば、みこの給へく、ありてある
んかしきて、すのこよれをしきりそ、すは紙ゆてに
こゑかし宣てあひまうり、むかしからふをもまうり給
りて、此まうりよ母宮のゝ給はさりつれは、このおり
よつうよたまひ、御将をれちくうしき、こうつふかく
みんなさむさむとはりふ給へて、この御かれうりよ渡らり

かくて大はやしさんよえ給へつきて、為まうつの
かりこざりつるとうるしてるむよくはまうつのか
つまつしゆくやとれそやたとゆかしぬ、かたまうり
の宮れはまうりこん給つ、かうるむひの大孫ゆわ
とふ物のこ也までにりの大給えんしくこうは
のみちゆかりふあんとみ給へり、そこにつきされ
まうりと人まいりかう給しをこ河を給りて渡り
つまうく給しよ、この君一日二日まうり也まうり
もかひやをとめて、まうのかみとめ給しかは、
こまりてみ給へしよ、御かうさいなうしたかうとに
みせられうやうよあすか、宮めむ八丁の前をこなく

着たりしやこめあはせて、ほそなかみなくめでたきより
みなみのえうさくらとあかくきれいなるみかは
てなんかゝみ給ふよろこびなむさきもみなおえにしなん
給ひつゝいまいましきことのさまいつくしけらんとさせむと
て、かくこれつなひそて給ひてけらんせさせ給ふやうくいと
けうあかくこれ、さうくしむすいのく人のうたに
むまれ給ふみあけとは、みの殿人いとを若きく
らうあるまし人たらむくこそ下人なれは、みな殿ぞく
みくいと心みくるまし、ゆそともみゝ地さうち
つぶいやうみゝなして給へ、すまうりいとかさん
なる人かくよろつのあそんとひとくすむすまう

ちる君のうへ給ふ、せうとむかうはべらよるかくむ
あり、なりよろしそれとうんしかうて給うたうへ給じ
侍従のあそんといとくへしてそれをなむひさ給
らをまうみし、せうくは連くわたくしまうまうす
まうしまうくは、かうさまさら、時うけ給ふ
うちをまうさまり、か、そなたつきさん
人々のくまとゞの御ふえくさむあり
くらうく侍り、せうくあるうちにこそはあれ
をうし、これきこえしあらて、いのちを捧るにそ
あり給へるは、御とゞも給ふとられさく
いかれなことなりかしなんこにいはひさまへそ

あかりしやこめなくして、はくりみこくめくりよれ
みこのそうさうらくおくむれんちうは
てなんなるみ給、ふとりやさむくさもおほちえんなん
給しかハ、まさうしこのさまいてくりはらんとさせむと
てうしこれつるひそ給ふとてはらんせさん、ほゝくいと
けうあるうことれ、ときくむるいのくに人のうたに
むまれ給ふみありとは、この藏人いとも世をさく
らうあるまし人たちくてこそ下人なれハ、おほく
みくいとなみくるま、椎そともしろ、梅そうち
つさいしやうみ給ひて給ふすかもいとなん
なる人の子くよりさくのあそんとひとくるむするさ

ちなめのうえ給、おくらむとうちハとよるかくし
たり、あかりしもそれをもんしるて給ふたり。給ひ
侍従のあそんといとくへしてそれをるむひさ給
らもそるかみ、おほくとまくかねとしるまし、
するもとすくく梅さまさらうまさく、時うけ也て
うまもともらきさまいかにそやうちな花のつきくるん
人りのくかととのなすのふきえくひさくるむやうら
くうりく給しおほくあるかさうりにこそハあるなれ
なきうしこれなさしありてりのそく猿しるにそ
ありきれなるいとこなひとうほとりれさく
いかれなことはりまひむさ小ほうちにハ寿まうそ

かりことをまいはいあやしくめかきれさようくては
ゑかりしかうしをもなかり人よりのしうた
さうれおもひあり さよ川は十六人なくうり
ちしめてさうくさうはにつきまそてたかりをさ
くりえて給物すりそれよりかはとかも川う
たりうを此君よつくしてそまりて也すりふ
思ひ川此物を給ぐしてハ二三宇へうつくいそく
山かもたくいちのうへみも此君の御かんなおゆせ
あうねハむかし川よ一二とつうかんとら給うかん
よ給ふの君乃らふかれとおそよ給人あるのはらん
せんせんとそ思ひてかかんむまこ二たう二君うる

の御まうとこおりせうふうかりよく人うれしくあか
まさく御侍せさせ給ひ御とてはくこに思まゐいてをきう
おりと御侍しとてゆくれむこの君おはちうとう
しつくそてまうりて御とこのめきむこゝうそあう
めすおさてそまうりみせ給ふか将それハまゐうれ
まうれるりのてせんみんうひろすうつそれかそ
さりこたもれたことなりして此三人の人よるん給へ
つうしこゑてうをさかな物めくさめやうれなりのな
とゆきさうちれたらたくゆうりつくさうつ給くれ
ともれしぬちやうしやみすり給くたむまくのなり
きこうとくうりもこひ給ひく君ふつくとうて

大殿ハ正頼カ兼雅カ
侍従君ハ仲純カ

まうでこそやれとの給ひしに、さぶらふらうらうしけ
れとの大殿さうの院にもてはへりけれは、させ給へ殿
よまゐるとて、つかひしてかむ、ゆきまさ左大弁
の君よりうしめしてまゐりて、むま、うし、こゝら一つ
よそまゐりかう、あはれそこ人まなにはくるさ
かりし、女の、ようひとをは、あまたなにはくにのへ
よきこにうたま薄はく、ゑつまてをおこせたり、下
つくへらにはぬはぬさぬはか、人こにおこなり
うちて大夜よくる事とし二、ねま二、御ざうしの事よ清
多ふかうするむきのうけやさるうりたる一、とさゝく
られなるもえ二よあかるゝよさようかるる

女のよそひ一とらへうきれ一ゆへくらくて玖さぬあ
やれとられなく、紫玉の君よ、なはしとるゝのゆゑよ
まのられなるしく、つうへてあるくなまよそてある
あらくうるにとゆめを、きこぬうれあるめり瀬
のきみきようくもあらうかむとて、きまてまゐり給
つり、さうく文さむ、とうぬとあるうくてきうある
ねられく、のきありてみ給うくてありゆまりて
えのくきりてけうへもやと、れをへとまさとは
ふれうらし、ゆへかうとそつひよ、しらうち
むしうきぬ、つまひまく給ぐうくのとそつてるを
うらしそ給まうぬ、ゆるうきもまけふる

まうでくるやれとの給ひてよ。きこえさするうちけ
れとのきみ、宮さんの院にまかりたれはいとゝ琵琶
をまゐらせて、つかひしてまうむ。ゆきまさ太弁
の君はかうやうにめしてまゐりて。むまうし、たか一つ
よそほりうちとれたる人々にはりてこゝろ
うりし。女の、いとこといひしは、あてく宮のほとりて
よきことにたゝいみはしく、いつてをおほせらる。下
つくへかたにいぬいぬのきぬとゝ人とりにとゝのかりて
うらえ大夜よくる夜よし二、むま二、御琵琶のこよは
あふらつるむまのうけやきらかたる一、おとさく
らのところもそこ一よ、あふくるかよきこゆるかする

女れをそ一つをうけとられ。一はへうらうしてうまきぬあ
やれとられて、孫王の君よあることありのよまよ
りのうれなりけくこゝろてあかくきよよそてまう
あつかうにとゆらきをきゝぬかれなりてり源
の宮川をあそばしもあかきむ。とくきこえてまうり給
つり。さうくきこむとうつれと、あかりくてきこうある
れかれとくくのきこりてみ給うくてありかうりて
えのとりてりつうひやとれたくとまさとは
みれうらしらしらのなりとてつかひ白張
むらさきぬ。つくまてみくしくのそてつゝを
うそしそてよううかぬきこえつゝもあるなるぬ

り風のおと川やすくゝむしとをくしつゝ
これはおほくていとたかしとおもひてかう見えて。
なかきよもねられて。さぬるそてやつる
なかたゞうちこそは嵐の風はふきてめづらしくおぼさる
ねんごろになかれとてそてまつかねはなひとつ
ねまちはするをまちやすみぬあかりとそてなくしなん
を。おほうちの川やまかけて。さらにおとこゝろをかう
な。女これ見えうちぬめりそてまうして。こなた
さらまさくつぬれをなる川かなひとつくそへま
つり給ふ将のゆく。此人これそてまつるる捐
ともを。此その見ゆるよ。此まつる一つてこそま

つりあそふ御つゝくにゆく八日よ源宰相よ
ひさしうきこえぬむすめあはれ。八日は三月一日はよ
かへの花さかりむとそまうけそくる所を
てまうでたまへりしをすゑ給とほり
て。御かたにまうでたまひ。そのよろこびあそびと。
えまゐりて給ふ所はなむこそも利給。わたくしい
とわりさまぬるをも御つくろひなる。
はゞみて給をばいかなるやうのし給へん
とすゞゆきひ給なむそてあまりにさるのまへ
い一く。御たびさつきて。ことはゑかう
ちうまたゆかなりこてゆかきまゐりて。つくへいれたく

錦ふくさの中へいれさせてまゐらせ候へ
まきものにして。すなはち一まきの箱にいれ奉り
いとかしこまりてかへりつゝ絵まきをかね